



Title	『青銅の騎士』における歴史家プーシキン
Author(s)	国本, 哲男
Citation	大阪外国語大学学報. 1963, 14, p. 63-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80227
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『青銅の騎士』における歴史家プーシキン

国 本 哲 男

ИСТОРИК ПУШКИН В ПОЭМЕ 《МЕДНЫЙ ВСАДНИК》

КУНИМОТО Тэцуо

Пушкин интересовался историей не только поэтом, но и историком. Он писал много поэм, романов и статей на темы русской истории. Одним из исторических людей, которых Пушкин изучал специально как историк — является Петр Великий. Среди всех произведений Пушкина «Медный Всадник» занимает едва не первое место по художественности, и вместе с тем эта поэма особенно отличается сложностью и глубиной её идеи.

В поэме образ Петра выражается как просветительный монарх, который открыл окно в Европу, защитил национальную независимость России и укрепил государство. Восхваляя творение Петра — Петербург, Пушкин написал апофеоз Петра Великого. Однако в стране крепостнического строя устанавливать сильный абсолютизм, хотя исторически прогрессивный, невозможно без крови крестьян. Только за счет простых людей сияет слава государства. Пушкин видит такое насилие сверху в наводнении Петербурга, причина которого тоже насилие при постройке новой столицы «под морем». Наводнение как насилие абсолютизма разрушает счастье людей, в том числе бедного Евгения. Пушкин олицетворяет в образах Петра и Евгения историческую необходимость и историческую условность просветительного абсолютизма в их противоречии.

Но Пушкин не может оставаться при такой объективности. Он требует решения противоречия между государственностью и личностью в пользу народа и изображает борьбу за счастье личности в бунте бедного, сумасшедшего Евгения, который бросил «ужо тебе!» надменному императору Петру.

В этом отношении на понимание Пушкина о Петре большое влияние оказывает «Письмо к другу, жительствующему в Тобольске.....» Радищева. Не только понимание о Петре. В образе Евгения Пушкин видит самого Радищева — его личность, судьбу.

Объективное зрение на прошлое, теплое сочувствие простым людям и горячая революционная страсть к будущему — здесь сущность историка Пушкина. Он сын Радищева, брат декабристов и кольцо в цепи, связывающей Радищева с революционными демократами.

まえがき.....	135
1. 創作の動機.....	136
2. ピョートル, ペテルブルク, 洪水.....	139
3. エヴゲーニィ.....	144
4. プーシキンとラジーシチェフ.....	151

ま え が き

ロシアの作家のなかで、歴史にもっとも深い関心をよせていたものといえば、まず第一にプーシキンとトルストイがあげられるであろう。両者とも歴史小説を創作したというばかりでなく、トルストイは『戦争と平和』のなかで独特な歴史哲学を展開しているし、プーシキンは本格的な歴史書として、『プガチョフ史』（1834年）を書き、『ピョートル史』（準備テキスト）（1835年）を残している。

プーシキンは、すでに早くからロシアの「革命家」としてのピョートル大帝の人物に強い興味をいだいていた。まとまった作品としては、『ピョートル大帝の黒奴』（未完、1827—28年）、『ポルタヴァ』（1828年）、『青銅の騎士』（1833年）その他の小品が書かれている。これらの作品と『ピョートル史』に見られるプーシキンのピョートル研究、彼の歴史観、さらには「ピョートル観」については、『プーシキンとピョートル大帝』（『ロシア史研究』、第5号、1962年）でとりあげたので、ここでは、これらの作品の頂点をなす『青銅の騎士』をとりだすことにした。

この『青銅の騎士』は、きわめて格調の高い、力にあふれた、堂々たる叙事詩であり、その芸術的評価については、あのベリンスキーでさえも筆を投げだすほどのものである。「われわれは『青銅の騎士』の詩について、その弾力、力、エネルギー、壮大さについて、なにか語りたと思うのであるが、それはわれわれの手におえない。われわれのあわれな散文ではなく、このような詩だけが、この詩をたたえることができる^①」。この点はソビエトの研究者においても一般に広く認められている。たとえばペトロフは『プーシキン』（1961年）のなかでつぎのように述べている。「『青銅の騎士』は、思想の深さ、芸術的描写と情景のあざやかさ、詩のエネルギーと力の点で、おそらくプーシキンのもっとも完成された詩といえるであろう^②」。『青銅の騎士』の芸術的価値、ひいてはロシア最高の詩人プーシキンの芸術的高さについては、ふれる力をもたないので、ここではもっぱら「思想の深さ」の点をとらえ、「詩人」としてではなく、「歴史家」としてのプーシキンを評価してみたい。

ところで、『青銅の騎士』の思想的内容は、ベリンスキーの批評以来いろいろ検討されてきている。だが、まだ十分解決されてはいないようである。セルギエフスキーはこの点について、『プーシキン』（1955年）のなかで、つぎのように指摘している。「ピョートルの像は『青銅の騎士』のなかでその偉大さをすっかりあらわしている。これはプーシキンのもっとも深刻な、それとともにもっとも複雑な、もっとも「暗示的」な作品の一つである。詩のゆたかな象徴性は、きわめてさまざまな推量と臆測を可能にしている。プーシキンの作品のどれ一つとして、『ペテル

ブルク物語』『青銅の騎士』ほど多数の、矛盾した解釈を許しているものはない。このようなわけで、その真の意義は、根本的にはこんにちまで、まだ完全にときあかされていないままである」。^③

この「なぜ」を解くために、

- 1) この作品が書かれた状態、その動機
- 2) ピョートル、ペテルブルク、洪水の描写が意味するもの
- 3) 主人公エヴゲーニィの人間像、ピョートルとエヴゲーニィの関係
- 4) プーシキンがロシア思想史上にしめる位置、つまりプーシキンとラジーシチェフの関係、
歴史家としてのプーシキンの神髄

の順を追って説明していくことにする。

なお、この小論を書くにあたって、歴史家の立場から歴史家プーシキンの本質にせまったカフエンガウスの論文、『プーシキンのピョートル1世論』(1961年)^④に負うところが大きかった点をこ
とわっておきたい。

1. 創作の動機

プーシキンは1827年に「わたしはきっとピョートル1世の歴史を書きます」と述べたと、グリフの日記に記されており、^⑤ 1831年にはピョートル史を書く目的でアルヒフにはいっている。『青銅の騎士』が書かれたのが1833年10月であるから、ピョートルを中心にすえた作品の構想は、長く胸のなかで温められていたといえる。またそのころ、上からのロシアの改革者にたいする関心と時をおなじくして、下からエカチェリーナの帝国をおびやかした農民戦争の指導者プガチョフにたいする興味が、プーシキンの心を強くとらえている。『青銅の騎士』を書く直前の8月20日から1カ月ほどにわたって、プガチョフ史の取材のためにオレンブルクに旅行しているし、1833年1月から着手された『プガチョフ史』が一気に書きあげられて、1834年には出版されている。したがって、彼の頭のなかでは皇帝と反逆者が同時に、同じ比重で席をしまっていたのである。

プーシキンは若いときから農民の生活に同情をよせていた。彼は下づみの民衆に宿る人間性に温かい目をそそぎ、『ペールキン物語』を1830年に書いている。このなかではとくに、官吏としては最下層の14等官である『駅長』の姿が目をはく。こえて1832年には、没落した貴族で、正義観にもえた反逆児『ドゥブロフスキー』が書かれ、そのおなじ年に、未完ではあるが、やはり没落貴族で14等官の『エゼルスキー』が書かれている。このエゼルスキーは、その家系のすばらしさにもかかわらず、もはやそれにわずらわされず、勤労によって生活をたてる下層官吏として、平凡な生活を送っており、その性格にはドゥブロフスキーのように農民をまきこんで復しゅうを

企てるような荒々しさが見られない。また、プーシキンが精神的に一員をなしていたデカブリストのことが、1825年以後彼の頭から一時としてはなれたことがなかった。1830年の秋に『オネーギン』の「第10章」で貴族革命家の事業をうたいあげてからも、親友プーシチンをはじめ、彼らの運命にたいする思いが、詩人の胸にうずくまっていたのである。

あらゆる矛盾、あらゆる対立の調和に生きたプーシキンにあっても、1833年の秋にボルジノで『青銅の騎士』を書いていたころには、このように、皇帝、貴族革命家、反逆する没落貴族、平凡な暮らしに満足する没落貴族、民衆、反逆する農民——こういったものがそれぞれ所をえながら、プーシキンの頭のなかで渦まいていた。ロシア社会のこれら相対立する諸要素を有機的に結びつけ、それを一貫した構成のもとに芸術的象徴の力で結晶させたのが、『青銅の騎士』である。

だが、結晶作用にはきっかけが必要である。それはポーランドの詩人ミツケーヴィチ（1798—1855年）によって与えられた。

プーシキンがミツケーヴィチに注目していたことは、『青銅の騎士』にみずからつけた註からもうかがわれる。洪水の日の朝のところでは、つぎのようにになっている。「ミツケーヴィチは彼のすぐれた詩の一つ『オレシケヴィチ』のなかで、美しい筆で、ペテルブルクに洪水がせまってくる日のことを書いている。ただ残念ながら、彼の描写は正確ではない。雪はふっていなかった。われわれの描写はポーランド人の詩のようにあざやかな色彩をもたないが、より正確である^⑧」。さらにピョートルの銅像の描写については、つぎのとおりである。「ミツケーヴィチにおける銅像の描写参照。ミツケーヴィチが自分で認めているように、それはルバンから借用されたものである」。

これらの註は、いずれも情景描写にかんするものであって、思想的な内容にふれたものではない。おそらくプーシキンは検閲を考慮したうえで、このような点でミツケーヴィチをひきあいに出したのであろう。というのは、ミツケーヴィチの詩が反専制政治の激しい抗議につらぬかれていたからである。それはつぎのようなものであった^⑨。

彼の詩のなかでは、ミツケーヴィチはプーシキンとおぼしきロシアの詩人といっしょにピョートルの銅像のまえに立っており、ロシアの詩人が彼に銅像の意味を説明するという形をとっている。ピョートルはここでは「ローマの衣をまとった、鞭をもった銅像」と表現され、ローマの有名な銅像マルクス・アウレリウスと比較される。ローマ皇帝マルクス・アウレリウスは善の体現者であり、「人民にとって貴く」、「彼のもとでは密告者はへり」、彼は「祖国の幸福にかんする思い」で満たされている。これにたいして、ピョートルは「暴政の塊り」であり、ペテルブルクは

彼の個人的気まぐれから建設されたにすぎない。ピョートルは「自分のために首都を建設したのであって、民衆のために都市をたてたのではない」。したがって、ピョートルも独裁者の例にもれず、その事業は破滅を予定されている。それは銅像の描写にあらわれている。「ピョートル帝は馬勒をゆるめた。あきらかに彼はゆくでのあらゆるものを踏みつけながら飛んでいる。またたくまに彼は岩の端まで駆けのぼった。たけりたった馬はすでに蹄をもちあげた——ツァーリに駁しきれぬ馬は、くつわをかみ、歯をならしている。馬はとびたち、微塵にくだけることを感じさせる」。さらにこの像を、こおった滝にくらべ、つぎのように結んでいる。「やがて自由の太陽が輝き、西の風がこの国をあたためるであろう。そのとき滝はどうなるであろう？」

プーシキンとおぼしき詩人の口を借りてのべられたこの思想は、もちろんミツケーヴィチ自身のものにほかならない。当時ロシア領であったポーランドの詩人ミツケーヴィチは、革命運動のかどで1824年に逮捕され、祖国を追われて1829年までロシアに滞在し、その間デカブリストたちやプーシキンとまじわっている。ツァーリの軍隊によって無残にも鎮圧された1830年のポーランドの反乱のときに国外にあった彼は、ニコライ1世の専制政治にたいする激しい抗議の詩『ジャドィ』（1832年）を書いた。この反ツァーリズムの情熱が、ロシア絶対主義の確立者ピョートルにむけられたのである。

ロシアにしいたげられていたポーランドの、自由と民族解放のうたい手が、専制君主ピョートルの時代を冷静に研究し、彼に公正な判断をくだすことができなかったからといって、ミツケーヴィチを責めることはできない。だがこれでは、「歴史とは過去に投影された政治である」ということになる。ミツケーヴィチにおとらず自由にあこがれていたとはいえ、プーシキンはロシアの愛国者であり、冷静な歴史家の目にめぐまれていた。しかも、彼とおぼしき人物がひきあいに出されているのである。プーシキンとしては、だまっておれなかったであろう。ミツケーヴィチにたいする回答が書かれた——『青銅の騎士』である。

この叙事詩には、『ペテルブルク物語』という副題がつけられている。原稿には、はじめに10月9日、おわりに10月31日の日付がつけられており、ただちにプーシキンの検閲官ニコライ1世に提出され、ベンケンドルフの手からかえされた。1833年12月14日の日記には、つぎのように記されている。「皇帝の注意書をつけて、『青銅の騎士』がもどされた。偶像（кумир）という語は皇帝の検閲を通らなかった。

若い都をまえにして、
年老いたモスクワは色あせた、
新しい後のまえに
亡き帝の後のごとく

この個所は抹殺されている。多くの個所には？がつけられている。すべてこれらのことは、わたしにとって大きな相違である^⑧」。

プーシキン是指摘された個所の改作をこころみたが断念し、はじめのペテルブルクを描写した部分だけを、『読書文庫』1834年第12号に発表するにとどまった。死後ジュコフスキーが不都合な個所に手をいれて、『現代人』1837年第5号に発表した^⑨が、それは原作とはかなりくいちがったものである。ベリンスキーが利用できたのも、この不完全なものであり、完全に復元された形が発表されるには、十月革命をまたなければならなかった。

この叙事詩は三つの部分からなっている。まず導入部ではピョートルのペテルブルク建設のいきさつが簡単にのべられたあと、100年後のペテルブルクの情景がいきいきした筆で展開される。ついで第1部では主人公エヴゲーニィが登場し、彼の生活と希望が紹介されたあと、洪水がえがかれ、嵐のなかでのエヴゲーニィと銅像が対比される。第2部では洪水に流された恋人の家をおとずれて気のくるうエヴゲーニィと、青銅の騎士にのろいの言葉をなげつける彼の反逆、逃走、死がえがかれる。

2. ピョートル、ペテルブルク、洪水

ピョートルは、ペテルブルクの建設者として、叙事詩の冒頭にあらわれてくる。ロシアが西ヨーロッパからの遅れをとりもどし、外敵の恐威から国を守るべく、富国強兵をめざして国づくりに荒々しい歩みをはじめた18世紀の初めに、上からの「革命家」として、啓蒙絶対君主として、みずから斧を手にし、剣をふりかざしてロシアの国と、ロシアの国民を率いたピョートル大帝の、国家的、歴史的な役割が、プーシキンの筆で簡潔に、適確にあらわされている。それはミツケーヴィチのように、「個人的恣意」の立場からとらえられているのではない。

彼は考えた。

ここからスウェーデン人をおびやかそう。

どうまんな隣人への見せしめに、

ここに町をうちたてよう。

ヨーロッパに窓をひらき、

かっこたる足どりで海にたつべく

ここに運命づけられているのだ。

世界の旗は新しい波路をひらき、

ここへおしよせてくる、

さあ、自由に盃をあげよう。

外敵スウェーデンにたいする防御，ヨーロッパとの文化交流，通商——ピョートルの目ざしたものは、みごとに花ひらいた。

百年がすぎた。若い町，
北国の美と奇跡は，
森のくらみから，沼のなかから
はなやかに，ほこらかにたちあがった。

このあと，ペテルブルクの讃歌がつづく。それは都市の美について，四季の景観について，はなやかな若者の生活について，勇壮で頼もしい軍隊についてうたいあげられている。

われは愛す，なんじピョートルの生みの子！

ペテルブルク讃歌は，とりもなおさずその生みの親「ピョートル大帝讃歌」（ベリンスキー，547 ページ）にはかならない。ピョートルの改革のロシア史にしめる意義は，つぎの句で示されている。

若い都をまえにして
年老いたモスクワは色あせた，
新しい後のまえに
亡き帝の後のごとく。

しかも，愛国者プーシキンの確信は，ロシアとペテルブルクの過去と現在ばかりでなく，未来にむかってこそそがれる。

その美をほこれ，ピョートルの都，
ゆるぎなくたて，ロシアのごとく。

だが，叙事詩はピョートルの肯定的な面だけをとりあげた讃歌におわっているのではない。啓蒙であれ，なんであれ，ピョートルが絶対君主であったことにはかわりなく，なにものをもうちやぶろうとする専制的な意志の面，暗い力の面をプーシキンは見のがしはしなかった。

彼に背をむけ
はるかなる高み，
くるいたつネヴァのうえに，
高く手をのばし
青銅の馬にまたがり，
偶像がたっている。

荒れくるう濁流のなかに超然としてたつ青銅の騎士が、くるったエヴゲーニィの目にうつった
さまは、さらにごうぜんたるものがある。

とりまく闇のなかで
彼の姿はおそろしかった！
いかなる考えがその額に！
いかなる力がその身にひめられているのか！
この馬にはいかなる火が！
どこへ駈けるのか、
なんじごうまん馬よ、
どこでなんじの蹄をとどめるのか？
おお、運命の力強き支配者よ！
なんじは深淵のそばにたち、
その高みで、鉄のくつわもて
ロシアを後足でたたせたのではないか？

しかも、おそろしい顔をむけ、雷のようにとどろきながら、あわれな狂人をおっかけまわし、
死にいたらしめるのである。

プーシキンのがいたピョートルをこのように二つの面でとらえることには、ベリンスキー以
来あまり異論がないようである。たとえばブラゴーイは、つぎのように述べている。「ピョー
トル1世の形象は、『青銅の騎士』において、その後の進化と発展をえている……ピョートルはプー
シキンに、二重の局面においてあらわれた——たんに偉大なる国家的改革者のみでなく、『専政
的地主』の局面においてあらわれた^⑨」。

つぎに、洪水にうつろう。ロシア・リアリズム文学の開拓者プーシキンは、さきにあげた『註』
のところで洪水描写の正確さをほこっているが、敘事詩のまえがきで、わざわざつぎのように
ことわっている。「この物語に書かれている事件は、事実にもとづいている。洪水の詳細は当時
の雑誌から借用した。関心のある方は、ベルフの編集した記事を参照されたい」。これは1824年11
月7日の洪水をえがいたものであり、歴史家・地理学者であるベルフの『サンクト・ペテルブル
クにおこった全洪水の詳報』におさめられたブルガーリンの記事を参考にしたといわれている。
しかもその描写はきわめて躍動的であり、プーシキンがオレンブルクで採集したプガチョフの農
民戦争の情景をおもわせるものがある。

空はますます荒れくるい、

わきたちかえる釜のように
ネヴァはふくれあがり、怒号し、
突然、くるった獣さながら
町におそいかかった……
包囲だ！突撃だ！
盗人のごとき波は窓からしのび、
かけ走る小舟のともはガラスをくだく。

このような比喻は、洪水のひきぎわにさらにあざやかである。

だが、破壊にうみ
厚顔な乱行につかれて、
ネヴァはおのれの狂乱にみとれ、
さりげなく獲物をすてながら
もとの方へひきあげた。
兇悪な群をつれて
村に押しいった盗賊は、
つかみ、切りさき、くだき、うばう。
号泣、歯ぎしり、暴行、
ののしり、驚がく、戦闘！……
やがて、強奪につかれ
追跡をおそれて群盗は、
獲物をおとしながら
家路をいそぐ。

そのほか、荒れくるう水に「反逆する」(бунтовать) というような表現がつかわれている。これについて、ラヴレツカヤは、『ロシア史のテーマをとりあげたプーシキン作品』(1962年)でつぎのように指摘している。「銅像は、荒れくるうネヴァにも、エヴゲーニィにも対立させられている。この叙事詩では、ピョートルの事業にはむかう彼らの無意味さをあらわすいくつかの共通点が、自然力にもエヴゲーニィにも内在している点が注目される。銅像の足もとに押しよせる波とエヴゲーニィの反逆の外的表現とのあいだに類似点のあることは、あきらかである……ピョートルにはむかうこれら二つの力の一致を、プーシキンは彼らの抗議があらわれてくる形態にだけ認めているのではない。二つの反逆は、はかなく、無益であるから、気ちがいじみているのであ

る」。^⑨

この洪水の本質は、ピョートルにたいする無益な反逆にあるのであろうか、それはあわれな犠牲者エヴゲーニィと共通の立場にたつものであろうか。洪水の原因とその結果を考えると、それはまったく逆になってくる。

もともとペテルブルクは人工の町である。

ひろびろと川が流れ、
そまつな舟がわびしくくんだり、
こけむした泥の岸には
そこかしこ百姓屋が黒ずんでいた

ような所に、

運命の意志で
海の下に都をきづいた人

によって、農奴の強制労働をかりたてて建設されたのである。

ネヴァはみかげ石でよそわれ、
波には橋がかけられ、
島々は暗い緑の庭でおおわれた

とはいえ、そこには自然にさからう無理があった。

うちやぶられた自然よ、
なんじとやわらげ、
フィンランドの波よ、
古い捕われと敵意をわすれ、
むなしいうらみで

ピョートルの長きねむりをさまたげるな！

というプーシキンの祈りも、自然のたくましい力のまえにはむなしかった。いかに歴史的必然性であり、進歩的であったとはいえ、無理のうえにきずきあげられたピョートルの都にたいして、時いたれば水は反逆し、復しゅうする。それはまさに、啓蒙絶対主義の上からの改革そのものからうまれてくる暴力としてあらわれてくる。

ピョートルは「野蛮に抗してたたかうために、野蛮な手段をとることをためらはなかった」^⑩。農奴制国家が近代化の道を上から強引に切りひらいていくとき、上からの暴力は不可抗力である。不可抗力であるという点では、それは自然力に対比されうる。洪水がペテルブルクの住民の家を

おし流し、商品の水びたしにし、平凡な民衆の夢をいっきょに粉碎して気持ちがいにいたらしめるように、絶対主義の暴力は、人民にのしかかってくる。ピョートルの国家は「三枚の皮をひきむかれた農奴の犠牲のうえに」^⑩きずかれたからである。都の建設、港の開設、軍隊の創設にかりだされた農民、重い人頭税をその肩にかつがされた農民は、ピョートルの治世中にも、コンドラチ・ブラービンの乱をおこしている。

「海の下に都をきずく」ような無理を強行したことからうまれてくる洪水——それは農奴の肩で富国強兵をおし進めたピョートル絶対主義国家の暴力を象徴している。ラヴレツカヤのいうように、エヴゲーニィは洪水と共通の立場にたってピョートルに反抗しているのではない。洪水がピョートルにもとづく暴力として、エヴゲーニィをおしつぶすのである。ピョートルが荒れくるう波のうえに超然とかまえているのは、暴力におしつぶされる民衆の不幸に超然としている絶対君主の自信のあらわれにはかならない。この点でカフエンガウスの指摘は正しい。「ピョートルの形象と洪水の結合のなかに、ピョートルの改革の暴力的な、強制的な、『革命的な』性格の暗示をみることができる」^⑪。まさにそのとおりである。だからこそ、不可抗力としての洪水＝暴力について、プーシキンはアレクサンドル1世の言葉として

神のみわざには
帝もうちかてぬ

とうたっているのであり、皇帝の善意にもかかわらず、民衆を抑圧する力として認めているのである。

ところで、この暴力におしつぶされたあわれな犠牲者エヴゲーニィの性格が、ここで問題になってくる。彼とピョートルの関係をとくためには、エヴゲーニィの姿を正しくとらえることからはじめなければならない。

3. エ ヲ ゲ ー ニ ャ

プーシキンが、この叙事詩の主人公になみなみならぬ温い愛情をそそいでいたことは、その名まえ「エヴゲーニィ」から知られる。彼はわざわざ、それにつぎのような説明をつけている。

若いエヴゲーニィは、
まねきの席から家路についた。
われわれの主人公を
この名で呼ぶことにしよう。
それは——心地よくひびく。
その名とはもう古い筆なじみ、

名字はきかずともいい。

1823年に第1章を発表してから1830年まで、8年にわたって詩人が心血をそそいできた『エヴゲーニィ・オネーギン』の主人公とおなじ名前をつけられたこのエヴゲーニィは、詩人のそそぐ愛情にかわりはないにしても、性格の点ではあまりオネーギンに似ていなかった。彼はロシア文学における「余計もの」の先駆者であるのにたいして、これはまことに愛すべき小市民である。このエヴゲーニィの人物については、ベリンスキーもあまりくわしくふれていない。それは当時完全なテキストが発表されていなかったからである。

エヴゲーニィは、輝かしい先祖をもちながら、いまはおちぶれた貴族である。

すぎし世にその名はかがやき、
ふるさとの伝承のなかに
カラムジンの筆でうたわれたとはいえ、
いまは人の口にもものぼらず、
世のなかからも忘れられてしまった。
われわれの主人公はコロムナに住み、
ある役所につとめていた。
人のまじわりをきらい、
いまは亡き身内を悲しむでもなく、
忘れられた昔をいたむでもなかった。

このテーマは、1832年から33年にかけてプーシキンが書きかけて中断した『エゼルスキー』で、くわしく展開されている。エゼルスキーの家系は、リュールクの時代にまでさかのぼるのであるから、ロシア生えぬきの名門であったといえる。だが、エゼルスキー自身すでにこの家系にこだわっていないし、「いたるところで万とでくわす首都のたんなる市民」である。『エゼルスキー』の筆はここでとまっており、この表現はそのままエヴゲーニィに受けつがれている。したがって、エヴゲーニィの家系もリュールクの時代にまでさかのぼる名門であったとみていいであろう。プーシキンがこの点にふれていないのは、エヴゲーニィにとっては過去はすでに過去にしかすぎず、ただ現在と未来の生活だけが問題であったからにほかならない。彼もまた「首都のたんなる市民」であった。この月並みな市民の考えることも、きわめて月並みである。

僕はまずしい。
はたらいで独立と名誉を
手にいれなければならない。

もっと知恵と富をさずけられてもいいものを。

それに世のなかには、

知恵がたりないくせに

ぶらぶらしている幸福者や、

はるかに楽な生活をしている

なまけものがいるではないか。

僕はまだ二年しかつとめていない……

彼は恋人であるパラーシャとの結婚について、

深くため息をつき、

詩人のように思いをめぐらした。

「結婚すべきか？　僕が？」

どうしていけないのだ？

もちろん、それは苦しいだろう、

だが僕は若くて元気だ、

昼夜はたらいでもかまはない。

どうにかこうにか、ひっそりした、

ありふれた家をかまえたら、

そこへパラーシャをむかえよう。

一年、二年とたつうちには、

小さな地所でも手にいれて、

家庭と子供の世話を

パラーシャにまかせよう。

墓にねむるまで

二人で手に手を取りあって。

やがて、孫たちがとむらってくれるだろう。

プーシキンの原稿では、小市民の希望のつつましさは、さらにわれわれの心にせまるものがある。

寝台と椅子二つ。シチーの鍋、

それも大きなやつ。

ほかになにがいろいろ？

わがままはいうまい。
夏は日曜ごとに
パラージャと森を歩こう。
小さな地所でも手にいれて.....

他の「異文」では、つぎのようになっている。

僕はまずしい。たしかにそうだ。
パラージャにも財産はない。
それがどうした？ いったい、
金持だけが結婚できるとでもいうのか、
僕はひっそりした家をかまえよう....

さらに、『ノート』には、エヴゲーニィについてつぎのような描写がみられる。

彼はまずしい役人で、
身よりのない、まったくの孤児で、
あお白く、すこしあばたがあり、
身内もなく、一族もなく、
つきあいもなく、金もなく、
つまり友もなかった。
だがやはり、
あなたが万とでくわすような
首都の市民であり、顔も頭も、
あなたとちっともちがっていない。
みなとおなじように、いいかげんにくらし、
あなたのように、
金にひどく気をつかい、
あなたのように、
ふさぎこんではタバコをのみ、
あなたのように、
燕尾服の制服を着ていた。

貧富の差にたいする不満をもちながらも、自分は自分なりのささやかな幸福を夢みているエヴゲーニィにたいするプーシキンの愛情、プーシキンのヒューマニズムは、すでにこのころ活躍を

はじめていたゴーゴリの「ペテルブルク物語」へと、社会的なテーマとして発展していく。

それはさておき、封建制下のペテルブルクならずとも、資本主義下の大阪の町で、セビロを着たエヴゲーニィには、いやというほどお目にかかる。ゴーリキーは、「はうように生れたものは飛ぶことができない」といっているが、飛びたつことのできるのは才能にめぐまれた少数のものだけであって、残りをしめる平凡な多数のものは、はうように運命づけられているのである。凡人の幸福と夢とは、いつの世にも、しょせんこのようなものであり、このような凡人の夢をそのまま実現させるのが、本来の意味での政治であるはずである。絶対主義のもとでそれは可能であらうか？ もちろん否である。絶対主義そのものが、このような民衆の犠牲のうえになりたっているのであるから、民衆の個人的な夢の実現は、絶対主義そのものの否定を意味している。

われわれの共感をよぶエヴゲーニィの夢は、洪水（絶対主義の暴力）によって、一瞬にして押し流されてしまう。エヴゲーニィはまだ洪水の余波のおさまらぬうちから、パラージャの家にたどりつく。

あの家がたっていたところ、
ほら、あの柳、ここには門があったが、
きれいに運びさられている。
家はどこだ。
暗い思いにみたされ、
彼はそのまわりを歩きに歩く。
大声にわれとわが身によびかけ——
突然
手でひたいをたたき、
カラカラと笑いだした。

気のくるったエヴゲーニィの放浪がはじまる。だがやがて、彼の不幸の源——洪水——の原因との対決がおとずれる。それは「新しい都のための土地の選択」（ベリンスキー、547 ページ）、つまり「運命の意志で海の下に都をきずいた人」との対決にほかならない。

絶対君主とその暴力におしつぶされた狂人との対決は、敘事詩のなかでもっとも緊迫した場面をなしており、山をなしている。しかも、「不幸な男と『青銅の馬にまたがった巨人』とのこのたえまない衝突のなかに、また青銅の騎士の姿が彼にあたえた印象のなかに、敘事詩の意味がことごとく秘められているのであり、ここにその思想をとく鍵が存在している」（ベリンスキー、545ページ）。

偶像の台のまわりを
あわれな狂人はめぐりあるき、
全世界の半ばを支配する面に
燃えるひとみをなげつけた。
彼の胸はしめつけられた。
体はつめたい柵にもたれ、
目はかすみでおおわれ、
その心を焔がかけめぐり、
血がわきたちかえた。
彼は、ごうまんな像のまえで
気がふさいだ——
そして歯をくいしばり
指をにぎりしめ、
暗い力にとらえられたかのごとく、
激しくふるえる声でつぶやいた。
「おのれ、奇跡の創造者、
いまにみておれ！」
だが、突然一目さんに逃げだした。
彼には、一瞬、いかりにもえつつ
おそろしい皇帝の顔が
静かにふりむけられたかのように思われた……

ベリンスキーは、これを「公と私」の闘争、「公の勝利」としてとらえている。「恣意ではなく理性的な意志が、この青銅の騎士に擬人化されているのを、われわれは困惑しながら理解する……そして、この私人の苦悩にわれわれの同情をそそぎながらも、なお私的なものにたいする公的なものの勝利を、おだやかな心で認める……この青銅の巨人が、人民と国家の運命を保証しながらも、個人の運命を守ることができなかったことを、歴史的必然性がこの巨人の側にあったことを認める」(547ページ)。

たしかにそのとおりである。エヴゲーニィは一晚中、雷のようにとどろく青銅の馬の蹄の音に追いまわされて、逃げまどい、ついに死体となって発見される。ブラゴイーは、この点について、つぎのように指摘している。「貧しいペテルブルクの官吏 エヴゲーニィの狭隘で個人的な、卑

劣で利己的な希求にたいして、叙事詩においては、プーシキンが完全に理解し、受容していた国家的、歴史的必然性の命令的要求が対置されている」^⑩。

エヴゲーニィにむけられた皇帝ピョートルの顔は、いかりにもえていた。だが、エヴゲーニィは、いったい私的な願望のゆえに、あるいは国家的事業にたいする反逆のゆえに、歴史的必然性にさからったがゆえに敗北したのであるか？ そうではない。彼はすでに国家的暴力によって人間であることをやめていた。敗北したがゆえに反逆したのである。絶対主義のもとでは、いかなるものであれ民衆の夢と幸福がふみにじられるのは、ピョートルの改革が「歴史的必然」であるかぎり、やはり「歴史的必然」である。エヴゲーニィの敗北を「狭隘、個人的、卑劣、利己的」な願望に帰するのは、上から民衆を見くくらすことのできる、めぐまれたものにだけ可能な、あまりにもごうまんな態度であるといえる。

たしかに、結果としては公的なものが勝利をしめてはいる。だからといって、プーシキンが公的なものを良しとして全面的に肯定し、私的なものを否定しているわけではない。彼は冷静な目で、ピョートル絶対主義の本質を、その矛盾と対立の点でとらえているのである。ピョートルの改革は、ロシア史の大きな流れのうえにたって見るとき、歴史的進歩性をもっている。だからこそ、プーシキンは「ピョートル大帝讃歌」を書いた。だが、ピョートルがロシアの国とロシアの民を愛し、その強化と発展を願い、そのために有効な手段をとればとるほど、その重荷はますます重く民衆の肩にかぶさってきた。たしかに、ピョートルの指揮のおかげで、ロシアはポーランドのように亡国のうきめを見ることはなかった。だが、農奴制の国にあっては、抽象的な国民の幸福は、現実的な個人の幸福の犠牲のうえにしか、きずきえないのである。支配階級に属さないかぎり、個人の夢は狭隘であれ、壮大であれ、絶対主義の暴力のまえにひとたまりもなく粉碎されてしまう。絶対主義が絶対主義であるかぎり、君主が君主であるかぎり、君主と個人は、対立する両極にたつものである。

公的なものと私的なものとの平和的共存のなかに皇帝をたたえることは、ピョートルの時代、さらにその延長としてのニコライ1世の時代にとっては、ただ現実をぬりつぶし、そのうえに絵をかくような、現実から遊離した夢物語であるにすぎない。革命的情熱にもえ、リアリズム文学の開拓者であるプーシキンにとって、政府おほかえの御用文学者のまねができるはずがない。しかも「プーシキンは、事件や人物を、その複雑さや多様性を全体として見ぬき、記述する特別な才能をもっていた」^⑪。したがってミツケーヴィチのように一方的な判断をくだすこともできない。彼の目は、はなやかなペテルブルクのかげに、歴史のもつ必然性とその限界性を、その矛盾・対立の点においてありのままにえがきだしたのである。ここに非凡な「歴史家の目」を認め

ることができる。

このような「ピョートル観」がプーシキン独自のものであるのかどうかを、またロシア思想史にしめるプーシキンの位置の問題を、つぎに検討しなければならない。

4. プーシキンとラジーシチェフ

ピョートル大帝の銅像の建設は、ピョートルの娘・女帝エリザヴェータによって計画され、エカチェリーナの時代に実現された。彫刻はディドロの推薦にしたがって、フランス人ファルコネに依頼された。1768年に公開された原型について、政府はつぎのような解釈を発表している。「ピョートル大帝は土台になっている峻しい山を疾駆し、国民にたいして右手をさしのべた姿であらわされている。自然のままで、まったく装飾を加えられていないこの岩山によって、ピョートル1世のになった困難が示されており、疾駆によって彼の事業のテンポの速さが示されている。父親としての右手については、説明を要しないであろう^⑤」。これは家父長的君主の国民にたいする慈愛、庇護を示す解釈である。

これにこたえて、プーシキンが註のところであげているルバン（1742—95年）は、御代の栄えをうたいあげた。

ここにロシアの天然の山が、
エカチェリーナの口から神の声をきき、
ネヴァの深みをこえてピョートルの町にいたり、
大ピョートルの足もとにおさまった。

銅像の除幕式は、1782年8月7日に、ピョートル即位百年祭を記念してひらかれた。当日つめかけた群衆のなかに、ロシア最初の共和主義者、農民革命の主張者ラジーシチェフの姿もみられる。彼はその感懷を、翌日筆にあらわした。『トボリスクに勤務する友への手紙』がそうである。

「見よ、ふたたびわれわれの目のまえに、古い祖先の服をまとい、疾走する馬にまたがった人物、この都をひらき、それまで見られなかったロシアの旗を、ネヴァ川とフィンランド湾の水にはじめてかかげた人物があらわれた」（11ページ）。ついで軍隊の創設者、大工としての功績をたたえたあと、筆は銅像の解釈に進む。「山の峻しきは、ピョートルがその企図を実現するにあたってうけた障害である。道に横たわるヘビは、新しい風習の導入にたいして彼を殺害しようとした狡猾さと敵意である。古代の衣服、獣の皮〔馬具〕、馬と騎士のまったく単純な衣裳は、ピョートルが改造しようと考えていた人民のなかに彼が見いだした単純な、素朴な風習と未開さであ

る。月桂冠をいだいた頭は、立法者であるよりも戦勝者であったことを示している。その姿は雄雄しく、力づく、改革者の強固さを示している。さしのべられた手、ディドローのいうように庇護を示す手と、陽気なまなざしは、達成された目的にたいする彼の確信を示し、さしのべられた手は、力強い人物の意志に敵対する悪行をことごとく克服し、彼の子らと呼ばれたすべての人人に庇護を与えていることをあらわしている」（12ページ）。

ラジーシチェフはここで、皇帝の善意——国民にたいする庇護——を認めてはいるが、それはロシアの独立を維持した「戦勝者」としてであって、「立法者」としてではなかった点は、注目にあたいする。皇帝の善意にもかかわらず、その立法はきわめて峻厳であったからである。

ついで「大帝」の定義が展開される。歴史上、大帝とよばれるのは、「たとえ大きな欠陥をもっていたにせよ、祖国にたいする奉仕によって凡人にぬきんでた」（13ページ）人物である。ラジーシチェフは、「ピョートルに非凡な人物、まさに大帝の名にあたいする人物を認める」（13ページ）。彼は「第一物質のごとく不動の大塊に、はじめて運動をあたえたことだけでも、大帝とよばれうるであろう」（14ページ）。そのさきに、ピョートルをたたえる言葉がつづく。「親愛な友よ、祖国の荒々しい自由の最後のしるしをも粉碎したこのような権力的な専制者をほめたたえることによって、君の考えを卑下するにはおよばない。彼は死んでいる。死人にへつらう必要はない！　だが、わたしは述べよう。ピョートルが私人の自由を確立しながら、みずからも高まり、祖国をも高めたのであれば、彼はさらに栄光にみちることができたであろうに」（14ページ）。

ラジーシチェフは、ピョートルが私人の自由の圧殺者であることを認めながらも、歴史的必然性にしがたってロシアを前進させたピョートルをたたえている。さらに、公私の平和的共存をさえ、こいねがっているかのようである。だが、ラジーシチェフの思想の本質を示すただし書きが、これにつづく。

「だが、皇帝が平安な暮らしをのぞんで帝位を退くにしても、それは寛大さからではなくて、帝位にあいたからそうするのである。そうだとすれば、皇帝が帝位についたままで、自分の権力のうちたとえ一つでも自発的にゆずるようなことはおこらないし、おそらく世界の終りまでおこらないであろう」（14ページ）。

ラジーシチェフがいたいのは、皇帝が皇帝であるかぎり、国家の栄光と私人の自由、私人の幸福とが共存することは不可能であるということである。皇帝が自発的に譲歩することがないのであれば、私人の幸福のためには皇帝を強制的に譲歩させなければならない——ということが当然の結論としてでてくる。彼が逮捕されたのち、「プガチョフよりも悪いむほん人」と『ペテルブルクからモスクワへの旅』に書きこんだエカチェリーナが、この手紙につぎのように書きいれ

たのも、もっともなことである。「この文もやはりラジーシチェフ氏のものである。アンダーラインを引いた個所からあきらかなように、彼の思想は選ばれた道にしたがってまえから準備されていたものであり、フランス革命は彼をロシアにおける最初の追従者として認めることにきめたのである」(765ページ)。

ラジーシチェフのこの『手紙』が、プーシキンに影響をあたえたことについては、マコゴネンコが指摘している。『友への手紙』は……うたがいがもなく、プーシキンに巨大な影響をあたえた。詩人にとって重要であったピョートルのテーマは、『手紙』のなかで述べられたラジーシチェフの評価の観点から決定されている。ピョートルにたいするラジーシチェフのこの理解、人間と人民にたいする専制の敵意についてのラジーシチェフの確信は、『青銅の騎士』のなかに、もっともはっきりあらわれている」(766ページ)。

事実、プーシキンはすでに『青銅の騎士』を書く10年まえの1823年に、デカブリストの作家ベスツージェフ(マルリンスキー)にあてて、激しい口調でつぎのような手紙を書いている。「いまのところ、一つだけ君に文句がいたい——ロシア文学にかんする論文のなかで、どうしてラジーシチェフを忘れることができようか？ いったいわれわれは誰を記憶しているというのか？ このような黙殺は、君にもグレチにも許されないものだが、君が黙殺するとは思ひもかけなかった」^⑮。

さらに、『ペテルブルクからモスクワへの旅』にならって、『モスクワからペテルブルクへの旅』を書きはじめたのが、『青銅の騎士』が書かれた直後の12月のことである。この敘事詩を書くにあたって、彼がラジーシチェフを念頭においていたことは、疑いをいれない。しかも、それはたんに「ピョートル観」にとどまるだけではない。カフエンガウスも指摘しているように、「『青銅の騎士』におけるエヴゲーニィの形象は、詩人がラジーシチェフ自身の人間と運命を考慮することによってうまれたのである」^⑯。

プーシキンは1836年に、『アレクサンドル・ラジーシチェフ』なる一文を書いている。「いかに峻厳な人々がなおエカチェリーナの王座をとりまいていたかを考えるならば、ラジーシチェフの犯罪は狂人の行為のように思われる。小官吏で、まったく権力をもたず、まったく後ろだてもないのに、全体の秩序にはむかって、エカチェリーナにはむかって戦いをいどむとは！ つぎの点が注目される——陰謀家は同志の団結した力をあてにするものである。秘密結社の会員は、失敗したばあいには、あるいは自白によっておのれの許しをえようとするか、あるいは同志が多数であることをあてにして、無罪を予想するものである。だが、ラジーシチェフは一人であった。彼には仲間もなければ同志もなかった。失敗したばあいには——だがいったい、彼にはどのような

な成功を期待できたであろうか——彼は一人で全責任を負い、一人で法律の犠牲になったのである。われわれは、けっしてラジーシチェフを偉大な人物と考えたことはなかった。彼の行為はいつでも、けっして許されることのない犯罪であると思われた。『モスクワへの旅』は、きわめて月並な本である。だがそれにもかかわらず、彼には異常な精神をもった犯罪者を認めないわけにはいかない。それはもちろん誤っているのではあるが、しかし驚くべき献身と、騎士にも似た正義観をもって行動する政治的狂信者である。

だがおそらく、ラジーシチェフ自身、自分の気持ちがいじみた迷いの重大さをすっかり理解していたのではなかったであろう」。

検閲官ニコライ 1 世を考慮して書かれたものを通して、プーシキンの意図を十分くみとることができる。

『青銅の騎士』をデカブリストの象徴ととる人もいる。たとえば、岩間徹氏がそうである。「ピョートルの青銅の騎馬像は、ツァーリ権力を象徴し、青銅の騎士に追われて死んだエヴゲーニィは、ツァーリ権力におしつぶされたデカブリストを象徴する。ツァーリ権力にたいするデカブリストの悲劇的挑戦、これこそ『青銅の騎士』のテーマではあるまいか」。

これを否定することはできない。だが、プーシキン自身の語るところからすれば、エヴゲーニィはまさにラジーシチェフその人にほかならない。ロシア絶対主義の頂点にたつ皇帝にたいする反逆は、気持ちがいにならなければ不可能なのである。ベリンスキーが読んだテキストには、エヴゲーニィがピョートルに投げつけた肝心の言葉がぬけていた。それにもかかわらず、彼の洞察力はみごとに、皇帝と気持ちがいの対決のなかに、『青銅の騎士』の思想をとく鍵を認めたのである。

「おのれ、奇跡の創造者、

いまにみておれ！」

「いまにみておれ！」(Ужо тебе!)——これは「子孫がわたしの復しゅうをするであろう」という言葉を残して毒をあおいだラジーシチェフの最期を思わせる。気のくったエヴゲーニィは、もはや「万とでくわす首都の市民」ではなかった。徒手空拳、私人の幸福をふみにじったごうまんな皇帝にこぶしをつきだす狂人——それは「驚くべき献身と、騎士にも似た正義観をもって行動する政治的狂信者」の象徴である。反逆する狂人エヴゲーニィは、ラジーシチェフであり、それはまたデカブリストであり、デカブリストの歌い手——『アリオン』のプーシキンでもある。ラジーシチェフはたおれ、デカブリストはたおれ、プーシキンもまたたおれる、エヴゲーニィのように。彼らがたおれたのは、18世紀、19世紀初めのロシアには、まだ皇帝を打ちたおすだけの下からの力が成熟していなかったからにほかならない。だが「いまにみておれ」——そこ

に燃えるのは、未来にむかって呼びかける革命家の情熱である。

ミツケーヴィチの一面性から遠くはなれていたとはいえ、プーシキンは、価値判断を停止して、ピョートル絶対主義の本質についてすべてをありのままに、客観的に記述するというようなことにとどまっていることができない。それならば、エヴゲーニィの発狂で筆をおいてもいいはずである。ましてプーシキンには、ラヴレツカヤのように、「彼[エヴゲーニィ]の反逆が気ちがいじみているのは、無意味であるからだけでなく、客観的に不正であるからである」^②というように、つめたいことをいえるはずがない。

過去にたいして冷静な、客観的な「歴史家の目」をもつプーシキンは、「目」だけにとどまっていなかった。彼は下づみの民衆にたいする温い愛情をいただき、権力に反逆し、未来に呼びかける革命家のはげしい情熱にもえていた。

啓蒙絶対君主としてのピョートルの歴史的進歩性と、エヴゲーニィの幸福をふみにじらざるをえなかった啓蒙絶対主義の歴史的限界性、その矛盾をつきやぶり、私人の幸福を確立するために皇帝にたいする反逆——『青銅の騎士』にプーシキンがうたいこんだのはまさにこれであり、ここに「歴史家」プーシキンの神髓を認めることができる。

プーシキンこそラジーシチェフの直系の子であり、デカブリストの兄弟であり、ラジーシチェフと革命的民主主義者をつなぐ環であった。

「詩人と革命家の間」という副題をもつ岩間徹氏の『プーシキン』(1963年)の提出した問題にたいして、わたしなりの答案を書いたつもりである。プーシキンは「あいだ」にあったのではなかった。彼は革命的詩人(『ルスランとリュドミラ』の作者)であるとともに、詩人的革命家(『青銅の騎士』の作者)であったといえる。

註

① ベリンスキー『アレクサンドル・プーシキンの作品』(В.Г.Белинский, «Сочинения Александра Пушкина», 1843—46, «Полное собрание сочинений», т.7, 1955, стр.548) 以下ベリンスキーのこの論文からの引用は、本文中にページ数だけを示す。

② С.М.Петров, «А.С.Пушкин», 1961, стр.206.

③ И.Сергиевский, «А.С.Пушкин», 1955, стр.135.

④ Б.Б.Кафенгауз, «Пушкин о Петре I», («История СССР», 1961, №3, стр.150—160).

⑤ А.С.Пушкин, «Полное собрание сочинений в десяти томах», 1956—58, т.9, стр.543. 以

下プーシキン全集はこの版による。

⑥ А.С.Пушкин, т.4, стр.398.『青銅の騎士』はこの巻の377—398ページにおさめられており, 538—541ページに原稿が, 571—573ページに編集者の註がでている。以下『青銅の騎士』については, これらの個所からの引用にはページ数をあげていない。

⑦ ミツケーヴィチの詩をよむことができなかったので, つぎのものによった。

Кафенгауз, указ. статья, стр. 156—157.; В. Лаврецкая, «Произведения А. С. Пушкина на темы русской истории», 1962, стр. 105—106.; Примечание в т. 4 «Полного собрания сочинений».

⑧ т.8, стр.32.

⑨ ブラゴーイ, 『プーシキン』(1949年), 黒田辰男訳, 青木文庫版(1953年), 123ページ。

⑩ В.Лаврецкая, Указ. книга, стр.109—111.

⑪ В.И.Ленин, «О „левом“ ребячестве и о мелкобуржуазности», Соч., т.27, изд.4, стр.307.

⑫ И.В.Сталин, «Беседа с немецким писателем Эмилем Людвигом», Соч., Т.13, стр. 105.

⑬ Кафенгауз, Указ. статья, стр.159.

⑭ ブラゴーイ, 前掲書, 123ページ。

⑮ КаФенгауз, указ. статья, стр.150

⑯ «С.-П. ведомости, 18 июля 1768 г. Прибавление» [А. Н. Радищев, «Избранные сочинения», 1949, стр. 766.], この選集の10—14ページには『トボリスクに勤務する友への手紙』が, 765—766ページにはマコゴネンコの「註」がのせられている。以下この選集からの引用は, 本文中にページ数だけを示す。

⑰ Т.4, стр.573.

⑱ Т.10, стр.61.

⑲ Кафенгауз, Указн. статья, стр.158.

⑳ Т.7, стр.353—354.

㉑ 岩間徹『プーシキン』, 誠文堂新光社, 1963年, 252ページ。

㉒ Лаврецкая, Указн. книга, стр.111.

(1963. 10. 5)

脱稿後に手にいれた『歴史の諸問題』1963年 第9号にチェレプニンが『プーシキンの作品における歴史』(Л.В. Черепнин, «История в творчестве А. С. Пушкина», «Вопросы Истории» 1963, №9, стр. 25—44)を發表している。あらためて「プーシキンの歴史観」について述べるさいに, 紹介することにする。